

『夏を赦す』

長谷川晶一 著 廣済堂出版 1,600 円 (本体)

大会辞退を余儀なくされた 高校球児たちのその後の人生

会員 白井 潤一 (62 期)



1 本書著作の経緯

プロ野球、元北海道日本ハムファイターズのエース岩本勉氏(通称“ガンちゃん”)には、高校3年時(1989年)の夏の大阪府大会の記録が一切残っていないことは、よほどの野球好きでなければ知らないトリビアである。

高校2年時からその実力を発揮し、超高校級投手として騒がれていた岩本氏が、高校球児にとって最高の舞台である3年夏の大会に出場することができなかったのは、大会直前に一学年下のある後輩が起こした不祥事により、チーム全体として大会出場を辞退しなければならなかったためである。

岩本氏自身は、大会辞退という障害を乗り越え、その後ドラフト2位という高順位でプロ野球に飛び込むことができたが、同級生のチームメイトの多くは、大会辞退が原因で大学進学や社会人チームへの入団をあきらめざるを得なかったという。そのため、岩本氏は、一人チャンスを掴むことができたことに対し、申し訳なさや後ろめたさを常に感じ、チームメイトのためにプロ野球で奮闘していた。

本書は、「当時のことをどう思っているのか、同級生全員に会って話を聞き、書籍にまとめ、みんなの思いを消化して欲しい」という岩本氏からの依頼を受けた著者が、20名の同級生へのインタビューを丹念に実施し、思いを綴った書籍である。

2 チームメイトのそれぞれの人生

事件から20余年を経て実施された同級生に対するインタビューで明らかになるが、大学進学や社会人チームへの道が閉ざされるなど、大会辞退により失ったものは、

あまりにも大きいものであった。

しかしながら、20名の同級生は、プロ野球で活躍する岩本氏の姿を自分と重ね合わせ、大会に出場できなかったことを殊更言い訳にすることなく、それぞれ高校卒業後懸命に生きていることが印象的である。また高校野球部という共通項がありながら、その後の人生が様々であることは興味深い。

3 連帯責任の功罪

我が国には、個人の問題や不祥事を組織や団体全体の責任と捉える、いわゆる連帯責任の考えが広く普及している。

特に高校野球をはじめとする学生スポーツにおいては、連帯責任の考えが広がっており(チーム全員での罰走!は、誰しも経験するところである)、究極的に発動されるのは、個人の不祥事のためにチーム全体として大会への出場を辞退するという場面である。

個々人の責任感や連帯感を高めるのに連帯責任が効果を発揮することは否定できない一方、過度の連帯責任がもたらす弊害の存在もまた否定することができない。

岩本氏の場合においても、不祥事はあくまでも後輩の個人的な行為であった(チームメイトがけしかけた等の事情は認められない)ことに照らすと、大会出場辞退という形でチームメイト全員にその責任を負わせる必要があったのかは、意見が分かれるところである。

4 最後に

学生時代にスポーツをされた方には昔の思い出やチームメイトを振り返るきっかけとなるお薦めの一冊である。